

歴史研修会

纏向遺跡を訪ねて

(平成27年2月11日)

2月11日(水)。この日は、空から陽も顔を出し、前日までの厳しい寒さも少し和らいだ絶好のハイキング日和となりました。総計29名、元気に巻向駅に集合。やはり明るい春の到来が人の気持ちを和やかにし、足を外に誘うものなのでしょう。また、長い間テレビや新聞等では目にすることがあっても実際に足を運ぶことの難しかったこの遺跡に足が伸ばせて感慨深い一日になりました。

集合後、早速歩いて数分の駅近くの辻地区の建物群跡へ。ここでは川井代表の挨拶のあと岩本先生から規模や年代、遺構についての細かい説明がありました。

特に辻地区の5つの建物群には居館や物見櫓も含まれ、遺蹟は東西2キロ、南北1.5キロに広がっていることやその中心線は東西に一直線になっていることなどを教えて頂きましたが、この時代としては最大級の建物群であったことにも驚かされました。その後、近くの石塚、勝山、矢塚古墳、そして東田大塚(ヒガイダオオツカ)古墳に足を伸ばして坂東さんから説明を受けました。これらは前方後円墳出現前の古墳で纏向古墳群の中でも東田支群と呼ばれていますが、第二次世界大戦中の高射砲陣地設営のために削られ、後円部の墳丘が4メートルだけ残されている石塚古墳や現在では前方部が殆どみえず、後円部だけが残されている矢塚古墳の姿が記憶に残りました。

そして箸墓へ。この古墳は巨大な前方後円墳で被葬者は卑弥呼ではないかと言われていますが、この周りで暖かい日差しを受けながら昼食を摂りました。その後岩本先生から箸墓古墳にちなんだ邪馬台国や卑弥呼の話をお聴きしました。ここではいろいろ論議がある箸墓古墳の被葬者が卑弥呼であるといった説について話をされましたが、邪馬台国の年代や歴史を記述している魏書東夷伝倭人条を引用しながら、更にここで出土した土器の放射

線炭素年代測定の結果から、卑弥呼の埋葬は間違いないのではないかとのお話もされました。

次に訪れたのは、ホケノ山古墳、茅原大墓古墳、そして狐塚古墳でした。これらの古墳は箸墓古墳を含め纏向古墳群の中では箸中支群と呼ばれて、前方後円墳出現期のものが多く、ホケノ山古墳は纏向型前方後円墳、茅原大墓古墳は帆立貝式の前方後円墳、そして狐塚古墳は方墳と考えられています。



集合写真・箸墓古墳にて

今回訪れたのは、計8基の古墳でしたが、これ以外にもこの遺跡には築造時期の分かっていない円墳等もたくさんあり、見渡す小山が全部古墳に見えて仕方がありませんでした。

そして、最後に訪れたのは桜井市立埋蔵文化財センター。ここは昭和63年に建設され、開発に伴う発掘調査をはじめ、出土する遺物の集中的な管理を行っています。それ以外にも展示室では桜井市が行ってきた発掘調査資料を中心に桜井の通史をテーマとした常設展や特別展、速報展を行っています。私たちが訪れた際には中村学芸員さんから纏向遺跡についての丁寧な説明を受けました。

その中で土器の見分け方として①形が地域によって違うこと、②土器の色が地域によって違うこと、③作り手の技法が違うことに触れられました。また出土した土器には北朝鮮のものまであることには特に興味を惹かれました。

その後、JR三輪駅まで歩き、充実した思いを抱きつつ巻向を後にしました。

(八木 順一)